

平成13年度第2回宇都宮市冒険活動運営協議会議録

日時 平成14年2月27日(水)10時～12時
会場 宇都宮市冒険活動センター 会議室
出席者 坂本 宏夫 委員(市小学校長会)
中山 正孝 委員(市中学校長会)
三村 正行 委員(市PTA連合会)
坂井 勝雄 委員(市子ども会連合会)
益田 栄子 委員(市ボーイスカウト・ガールスカウト連絡協議会)
渡辺美津子 委員(市レクリエーション協会)
新村 尚 委員(県キャンプ協会)
西 順一 委員(宇都宮大学)
加藤 義雄 委員(篠井地区むらづくり推進協議会)
阿久津 孝 委員(市森林組合)

事務局 竹内 律 (冒険活動センター所長)
大豆生田将 (冒険活動センター副所長)
塚原 和哉 (冒険活動センター指導主事)
坂野 忠 (冒険活動センター指導主事)

1 開 会

2 会長あいさつ

3 議 題

(1) 報告事項

施設利用状況について

平成14年度学校利用計画・主催事業計画について

(事務局) 資料1「平成13年度利用状況」,資料2「平成14年度学校利用計画・主催事業計画」に基づいて について説明。

その他

(事務局) 以下について説明。

- ア 利用者のための研修会を3月にという案があったが,利用団体は夏休みの利用が多いので,6月実施が妥当と考える。その他,電話等で随時問い合わせに応じる。
- イ 船生街道沿いの看板は検討の結果,制約があるため設置できない。J Aの協力でセブンイレブン付近に手製の看板を設置した。
- ウ HPによる情報発信については,市のHP内にある冒険活動センターのHPを4月から新しくし,見やすくする。また,教育情報システム内にHPを新規開設する。アドレスの改善やリンクの充実を図りたい。
- エ 冒険活動の教育的効果については,学校利用と冒険キャンプについてアンケートを実施し調査したので,このあと協議してほしい。

(西会長) 看板の制約はあるのか。遠方からの利用者が迷うことはないか。

(事務局) 大きい看板はひとつだけ許可されるがすでに設置済み。利用者にはガイドを送付しているので,それほど心配はない。

(坂井委員) 子ども情報センターで広報誌を出しているが,県の情報が多い。市の施設の情報も提供して欲しい。

- (事務局) 所報を発行し、主催事業は市の広報紙で知らせ、市庁舎ではパネル展を開催している。公民館等にも情報を流している。
- (西会長) 一番の情報源はここに来た子どもたちか。
- (事務局) 市の広報紙も大きい。リピーターは子どもが連れてくることも多い。
- (事務局) 子どものいる家はよくわかっているが、開催中のパネル展のアンケートからは名前しか知らない人も多い。PRの必要性を感じる。
- (坂本委員) 文部科学省の生涯学習推進課に冒険活動センターを活動の中身までよく知っている方がいる。これからの教育活動で注目を浴びている。
- (西会長) 完全実施される指導要領の中で冒険活動は重視されているので、省としてもその実態を知りたいのだろう。
- (三村委員) アクセスはバスしかないが、停留所は近いか。一日何本あるのか。
- (事務局) 800mほどの所にあるが、日中は1時間1本ほどである。
- (三村委員) 子どもの利用はバスがベースになる。バス会社にバス増発やワンコインバスの運行、停留所の設置等を働きかけられないか。冬場の利用増にもつがる。
- (事務局) 子どもは親が送ってくるという先入観があった。検討してみたい。
- (新村委員) 公園として自由に出入りできるとすると、事故や危険性の問題はないか。
- (事務局) 危険なものについては掲示や覆いをつけているが、100%安全とはいえない。
- (坂本委員) カウントされない利用者もいるか。どのくらいいるか。
- (事務局) ハイキングや遊びに来るなどセンターに寄らない人も多いため、数の把握はできない。冬場はほとんどいない。
- (加藤委員) 一里塚の信号の所にわかりやすい看板があるといい。努力してみたい。
- (益田委員) 子どもの家などクラフト製のいい看板がある。センターにふさわしい子どもの夢のある看板をぜひ設置して欲しい。
- (西会長) 県に働きかけなければならない。
- (事務局) 公共施設でも、国道県道については一施設一看板が原則である。
- (阿久津委員) 日光街道は船生街道入り口から榊里までが規制対象であり、その先は大きな看板もある。既成の木の看板を大きいものに変えてはどうか。バスに関して、船生行きは赤字のため、石那田を經由している。石那田行きを団地まで延ばせれば、その行き帰りにセンター前を通ることも可能だろう。
- (坂井委員) 大きなイラスト看板をろまんちっく村にたててはどうか。役立つと思う。
- (新村委員) ここは教育施設なので、目的をもった人が使えばいい。一般の人が大勢来ると教育的にマイナスにならないか。多くの人にPRする必要はあるのか。
- (事務局) 教育施設である側面とリクリエーションの場である側面がある。確かに大勢の人により自然が荒らされる恐れがあるが、今のところそれほどではない。
- (西会長) ここに来たい人向きへの看板を改善して行って欲しい。

(2) 協議事項

平成13年度冒険活動事業の成果について

ア学校の冒険活動

イ主催事業(冒険キャンプ)

- (事務局) 資料3「冒険活動アンケート(1・2学期集計)」,資料4「平成13年度プログラム集計」,資料5「冒険キャンプアンケート」に基づいて説明。
- (西会長) 資料3について質問や意見はないか。

- (三村委員) アンケートの対象者は担任か。冒険活動担当のような先生はいないのか。
- (事務局) 学校の事情によるが、ほぼ該当学年になった担任が答えている。
- (三村委員) 資料3(2)でねらいが達成されなかった理由について小学校で、家庭教育力不足とあるが、家庭教育の部分なので、学校にいてもしかたない。中学校では、生徒の自覚不足と悪天候が挙げられているが、異質のものである。
- (事務局) “その他”の数は大きくなったが、書かれたことばは少ない。アンケートの質問項目が未熟なため、アンケート項目について来年度研究していきたい。
- (新村委員) 二校一緒などの活動形態別に同じような調査をし、データを取るとその差から、学校側の要望に応じた提案もできるだろう。
- (益田委員) “ゆとりがなかった”と感じた理由は。
- (事務局) センターではゆとりをもってと勧めているので少なくなったが、学校によっては活動プログラムをたくさん入れるところもある。その結果、時間に追われ、教師自身が反省しているのだろう。
- (益田委員) 自覚がない子どもが多いようだが、わかっているにもかかわらず動かない、聞いていても動かないなど大切な問題であろう。
- (西会長) 身につくまでは大変だが、センターで共同生活をしているうちに、自分の生活習慣が身についていないことに気づくこともある。
- (益田委員) ゆとりをテーマにキャンプをしたが、みんなで協力しないとゆとりは生まれないと気づいた子がいる。
- (西会長) 保護者会などで、家庭に連絡することはあるか。
- (坂本委員) ある。保護者会や事前指導の場など。
- (中山委員) 「センターでよくやっていた、家でもさせてください。」と指導したところ、家でもやるようになった例がある。
- (渡辺委員) 実行委員会はセンターまで来るのか。
- (事務局) 学校によるが、事前に土日などに来て視察や活動体験していくところもある。
- (渡辺委員) 生徒の手で活動が展開していくのはとてもいいことだと思う。
- (三村委員) 指導者研修会のもち方や内容はどのようなものか。
- (事務局) ひとつは活動の体験及び指導法の伝達で、もうひとつは利用計画の検討である。
- (三村委員) 班分けや生活面での助言などをして欲しい。
- (西会長) 活動によって男女別になったり混合になったりするののか。
- (事務局) 基本的には男女混合が多いが、男女別や能力別など目的に応じて班編成を工夫している。
- (西会長) アンケートでは活動面と生活面が混じっているのだから、改善して欲しい。
- (西会長) 資料3(4)について質問はないか。
- (新村委員) 時間に追われるプログラムはだめ。プログラムの目的を達成するためには子どもたちの心の準備やふり返りの時間を確保する必要がある。プログラムを消化するのではなく、プログラムとプログラムの間に心をどう変化させていくかが大切。研修会ではその点を伝えて欲しい。プログラム一覧は便利だが、期待できる目標によって分類されていると使いやすい。
- (西会長) 学校はひとつのことを完結していてもいなくても次に行くことになれているが、事前事後を含めて心や気持ちの面まで考えることはいわれぬと気づかない。ゆとりとはそこまで考えていることを伝えて欲しい。プログラ

- ム一覧表には目的に関することについてひとことでも入れるといいだろう。
- (新村委員) プログラムをモデル化し、このユニットでこういう効果が期待できるとまとめたものがあるといい。
- (坂本委員) ユニットをつくと学校は甘えてしまって、同じことしかししない恐れがある。間をつくることは大切だ。
- (渡辺委員) 資料4(2)で“職員に任せきりで”とあるが、教師の指導も必要ではないか。
- (西会長) 毎年引率が変わるので、こういう意見がでてくるのだろう。
- (坂本委員) センターの独自性として、つれてくれば班ごとに指導者がついて安心して活動できる点がある。そこが注目もされている。
- (西会長) 学校は専門的な準備はできないので、安心できる面がある。
- (坂井委員) 子供会にも同じことがいえる。高校生のリーダーがくるが、おとなは高校生に任せきりである。指導者や育成者はある程度の知識は必要であろう。
- (事務局) 危険なものは先生に補助してもらっている。ふだんの様子は先生にしかわからない。指導中の顔を見て、学校での指導に役立ててほしい。
- (西会長) 基礎的な面は手伝えるが、性格や行動面は先生にみて欲しい。
- (新村委員) 野外活動の指導者が足りないといわれるが、キャンプ協会には資格をもつ指導者がたくさんいるのに、それを生かす場がない。協会としても場づくりに努力しているが、子ども会等で野外活動を計画し指導者が欲しいときには気軽に連絡をして欲しい。喜んで手伝う。
- (坂井委員) まもなく週五日制が始まるが、我々も指導者の養成を重要な課題として受け止め、関係団体と広くタイアップして指導者研修について話し合っている。
- (西会長) 指導者の問題はすべてのスポーツについていえる。指導者養成はかなりされていて、研修を受けて資格のある人が登録されたリーダーズバンクができていのに、声がかからない。情報が行き届いていないのがネックと思われる。センターを利用する場合には、ここに問い合わせると指導者を派遣できますよという、要請する側と派遣する側の間をつなぐ情報をどこかにおきたい。
- (西会長) 資料5について質問や意見はないか。
- (坂井委員) 子ども会としては別紙2にある期待目標に力をいれて欲しい。資料5(3)に出てくる生活習慣やしつけについても大切だが、本来家庭でやるべきで、センターでやらなくてもいい。センターでは自然の知識や理解、自然への興味・関心について力を入れて欲しい。結果的には、期待目標にでている豊かな心を育むというところを重視して欲しい。集団活動の中でしか培われないものもあるが、もっと子どもたちの感性を育むような活動が極めて重要だ。子ども会では来年度の目標として「センス・オブ・ワンダー」すなわち感性を育む活動を取り入れたい。
- (西会長) 資料5(3)からは仲間づくりや仲間との交流について効果があるようだ。今の子どもたちはテレビゲームなどの遊びが多く、直接友だちの触れ合いが少なく、仲間づきあいがうまくないといわれているが、別紙2の冒険活動の考え方の中に、仲間と共にという点について触れていない。この表現からは、ひとりひとりを対象にしているが、仲間と協力して克服するとか、感動や成功間を共有するといった文言が入ってもいいと思う。今の子どもに一番欠けているのは仲間との触れ合いであり、文部省も力を入れている。

(阿久津委員) かなりの数の子どもたちが限られた林の中で活動していると、少なからず自然に影響を与えてしまう。実際、暗い森の中がずいぶん明るくなっている。近隣の市有民有林を利用させてもらって、センターの自然を保護することも必要だ。将来の問題として考えておくべきだろう。

今後の課題と具体策について

(事務局) 別紙1「冒険活動事業の成果と課題」、別紙2「冒険活動センターにおける冒険活動センターの考え方」に基づいて説明。

(西会長) 新年度へ向けての「困難を与えて」というテーマに限ってどうか。

(新村委員) センターの設立の趣旨は、さまざまな課題を与えてそれをみんなで協力して解決していく中に教育的価値を見出している。例えばイニシアティブゲームは課題解決のトレーニングのひとつである。要は、そのトレーニングの成果が実生活に生かされているかどうかである。先生方のアンケートの中でマイナスの意見として「能力差が出て...」「仲間に入れぬ生徒が...」とあるが、これが本当の課題だろう。その課題をどう解決させるかについて、先生方が真剣に考えることが必要だ。さまざまな活動内で自然発生したさまざまな課題を自分たちがどう解決していくかということを経験するのがセンターの本来の意義だと思う。アンケートからは、先生方はプログラムを成功させるという目的にとってのマイナス要因としてとらえている。本来、プログラムは課題を解決する上での手段である。本末転倒している。グループ内の課題は社会生活の中にもでてくる。それを擬似的に集団生活の中で起こさせ、子どもたちに解決させていくという手法を指導者側は、しっかりと身につけるべきだ。そうすると内容のある冒険活動になっていく。

(西会長) 克服する困難というのは、自然を相手にしたものに限らず、グループ内の人間関係における問題も含めて考えるということではどうか。ただ、小学校の場合、一泊のうちにあまり困難な経験をすると子どもがいやがることもある。意欲が高まった段階では困難を乗り越えようと思えるが、何も無い段階で困難を与えられるとその障害は幼い時期ほど大きくなる。適度な困難とあるが、困難の前には楽しい体験が必要だろう。冒険活動だからといってあまり困難にこだわらなくてもよいのではないか。

(坂井委員) グループを組んでも個人でも集中力のない子や無気力・無関心・無感動の子どもたちは、プログラムを組んでも参加できない。何とかして育てられるプログラムが必要ではないか。

(事務局) 教室では活躍できない子が、輝いて活動しその後クラスでも変わったいたということはよく聞く。逆に自分が選んだ活動で取り組めないという子は少ない。自分で選んだ、好きな活動なので、生き生きとした表情を見せている。

(西会長) 冒険だからといって無理に困難を与えなくてもよい。日常生活であまり心が燃えない子がこういうところで燃えるのであれば、いいのではないかと。アンケートの結果に対する意見を伺ったので、来年度に向けて課題を設定してはどうか。

4 閉 会